

戦争を繰り返してはなりません

忘れられぬ唄と家族のおもかげ

唄が大好きという海老名さん。

十一歳で戦争孤児になったのち、懸命に生きていく中で、心を支えていたのが、家族が残してくれた手紙と唄だったという。唄の思い出、戦争を語り継いでいくことへの思いを聞いた。

エッセイスト

海老名香葉子

●えびな・かよこ 1933年東京都生まれ。東京大空襲で兄1人を除き一家6人を失う。18歳で落語家・林家三平と結婚。80年の三平師匠逝去後は、テレビのコメンテーター、エッセイストとして幅広く活躍し一門を守る。最新刊『母と昭和とわらべ唄』（鳳書院）。

わらべ唄と幸せな思い出

今年五月に次男（二代目林家三平）夫婦が新婚旅行と親孝行旅行を兼ねて、インドネシアのバリ島に連れて行ってくれました。そのときに、思い出した唄があります。それは再疎開した石川県・穴水で迎えた終戦のとき、海軍省に勤めていた私のおじ

さんが歌った『インドネシア・ラヤ』でした。

歌い手さんになればいいのに、と思うくらいにいい声でね。歌いながら涙をポロポロとこぼすのを見て、インドネシアという国にほだ思いいれがあるのだらうなと思ったんです。私は当時十一歳でしたが、おじさんに教えてもらって、その唄がまると私の体に入ってしまったので

しよう。

息子に言われてホテルの客室担当の方にその唄を歌ったら、とても驚いてくれて。帰るときには支配人の方に「もう一度歌ってください」と言われ、従業員のみなさんの前で歌ったところ、大合唱になって、みんなポロポロ泣いていました。

自分でも、最初から最後までよく覚えていたなあと思うのですが、子

どものころ、一生懸命聞いた唄というのは、体に染み込んで、いくつになっても覚えているのかもしれないね。

戦前、父や母、おじいちゃん、おばあちゃんが口づてに教えてくれたわらべ唄も、幼い私の体にすっぽりと入っているんです。当時の幸せで温かな思い出と一緒に。

私の家は江戸和竿師といって、釣

り竿を作っていました。初代は第一回のパリ万国博に出品し、明治天皇にご褒美をいただき、一躍名人竿忠さおと称された人です。三代目竿忠である父は、生粋の江戸っ子で、下町の職人仲間に「あにさん、あにさん」と慕われた人でした。母は祖母と一緒に本当によく働く人で、いつも優しい声で話しかけてくれました。三人の兄や近所のお友達と学校へ行ったり、道ばたで遊んだり

——そこにはいつもわ

らべ唄がありました。

おばあちゃんが歌ってくれた『おりしよりしよりしよ』、大晦日の晩に兄たちと歌った『大晦日の晩に』、七草がゆを作りながら母が歌っていた『七草囃はやし歌』、お友達と一

東京大空襲で失った家族

たくさんのわらべ唄が、幸せな思い出とともに私の体に入っています。戦争前に家族をはじめ下町のおじさん、おばさんやお友達が与えてくれた愛は、私の宝物です。戦争では逆境に突き落とされましたが、わらべ唄とともにいいことだけ思い出して、懸命に生きていました。

私は戦争中、十歳のときに父方のおばさん夫婦を頼って、沼津へ縁故疎開しました。その翌年の一九四五年三月十日に東京大空襲があり、三兄の喜き兄ちゃん（四代目竿忠・中根喜三郎氏）以外は家族全員が行方不明になりました。いまも行方がわかり

